

複雑述語の述語形式の違いから見る 構造と意味の対応関係 ——「Vすぎる」と「Vすぎだ」の分析——

阿久澤 弘陽

1. はじめに

いわゆる統語的複合動詞「Vすぎる」には、表面上似た形式として、派生名詞「すぎ」がコピュラを伴った「Vすぎだ」という述語形式が存在する^{1, 2)}。

- (1) a. 太郎が寿司を食べすぎた。
b. 太郎が寿司を食べすぎだ。

「Vすぎる」についての論考は数多く存在し、その統語構造や意味解釈のメカニズムはかなりの程度明らかにされてきた(影山 1993; 由本 2005; 井本 2008; 東寺 2018等)。「Vすぎる」の論考と比べると数は少ないものの、名詞化した「Vすぎ」についての論考も存在し、その叙述機能や意味解釈規則が論じられている(由本 2012)。

本稿では、「Vすぎる」と「Vすぎだ」という二つの述語形式を取り上げ、両者の形式的差異がどのような構造的・意味的差異を生んでいるのかを、主に記述的な観点から明らかにする。なお、具体的な意味解釈のメカニズムや統語構造の仔細については先行研究に譲り、現象の記述を中心に行うこととする。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2節で、「Vすぎる」と「Vすぎだ」という二つの述語形式が生む意味を見ていく。特に、「Vすぎだ」については、由本(2012)の議論に従いながら、その意味的特徴を明らかにする。第3節では、本稿での構造的議論の前提となる「繰り上げ」と「コントロール」構造について言及し、第4節において、「Vすぎる」と「Vすぎだ」のそれぞれの構造を明らかにする。第5節では、二つの述語形式が生む構造的差異を、「再構造化現象」の観点から示す。第6節で本稿のまとめを行い、今後の課題について述べる。

2. 「Vすぎる」と「Vすぎだ」の意味

本節では、「Vすぎる」と「Vすぎだ」の意味の差異を見ていく。その上で、まず「Vすぎだ」の意味を由本(2012)に従って確認する。

由本(2012)は、叙述機能を持つ「Vすぎ」に着目し、「Vすぎ」が叙述的な「の」を介して名詞を修飾する「Vすぎの+N」を取り上げて、その意味について論じている。由本(2012)によると、「Vすぎ」はその修飾対象が、①状態変化を含意する他動詞か非対格自動詞の内項の場合と、②外項の場合で解釈が異なるとしている。具体的には以下のような例を挙げながら、前者は「ある特定の行為や変化の結果として描写される状態」であり、後者は「ある種の属性を表す」としている。

- (2) ① 冷やしすぎのビール、冷えすぎのビール
② 働きすぎの人、遊びすぎの子供

(由本 2012: 132-133)

由本(2012)は、前者が場面レベル述語であるのに対し、後者が個体レベル述語の一種であるとし、特に後者は、益岡(2008)にしたがって、過去のイベントを履歴として所有することを表す「履歴属性」に分類されるとしている。ここで、「Vすぎだ」という述語形式に目を転じてみると、上記の由本(2012)の分類がそのまま当てはまると考えられる。

- (3) a. このビールが冷やしすぎだ。
b. このビールが冷えすぎだ。
c. 太郎が休日に働きすぎだ。

(3ab)は、ある一時点における行為の結果として生じた対象の状態の行き過ぎを表しており、(3c)は、行為の行き過ぎが慣習化・日常化しており、そのことによって主語の性状が表わされている(由本 2012: 132)。

こうした違いは、「Vすぎだ」がVに何を選択するか、すなわち内項に何を選択するかの違いにも

関与していると考えられる。まず、(3c) のような「履歴属性」の場合においては、「太郎」という叙述対象に対して、「彼が休日に働く」という事態が繰り返し当てはまるということを描写している。つまりある叙述対象に対して、ある命題（事態）が繰り返し成立し、かつそれが過剰であるということ述べているのである。そして、命題の過剰（繰り返し）は、文脈さえ整っていれば、仮に埋め込み節述語がスケールを持った変化を表していなくても成立する（= (4c)）。したがって、(3c) の場合は、埋め込み節に命題を選択していると考えて差し支えがないだろう。一方で、(3ab) のようなある対象の状態の過剰を表す場合は、内項には必ずスケールを持った変化を表す述語がこなければならないという制約がある（= (4ab)）。これは、ここでの過剰が埋め込み節事態を対象とするのではなく、あくまでも変化や行為の結果状態の過剰を表しているためである。したがって、(3ab) の「V すぎだ」が命題を選択しているかは定かではない。

- (4) a. *ドアが閉めすぎだ。
 b. ??ドアが閉まりすぎだ。
 c. 太郎がドアを閉めすぎだ。

上記の事実を踏まえて、本稿では、内項に命題を選択する「V すぎる」との比較を行うのが主な目的であるので、以下、「V すぎだ」の議論の対象を(3c) のような「履歴属性」を表すものに限定することとする³⁾。

さてここで、前節で挙げた例を再度見られたい。

- (5) a. 太郎が寿司を食べすぎた。
 b. 太郎が寿司を食べすぎだ。(=再掲(1))

これらの述語は一見似通った意味を持つように見える。しかし特に「V すぎだ」に関しては由本(2012)の議論にしたがいながら見てきたように、この二つの述語はイベント性の有無に違いがある。本稿での分析に必要な意味を簡潔に述べると、「V すぎる」は、埋め込み節事態が過剰であることを意味しているが、「V すぎだ」は、主語が過剰である埋め込み節事態の属性を持っている、ということを表している。ここで、「V すぎる」は内項に命題を選択する一項述語であるのに対し、「V すぎだ」は外項に属性主を、内項に命題を選択する

二項述語であると仮定したい。「V すぎだ」が属性叙述の一種（履歴属性）であることはすでに述べたが、この事実は以下の例で示される。

- (6) a. 昨日太郎が寿司を食べすぎた。
 b. *昨日太郎が寿司を食べすぎだった。
 (7) a. 学生が三人寿司を食べすぎた。
 b. *学生が三人寿司を食べすぎだった。

(6ab) の対立は、「V すぎだ」では「昨日」のような時間副詞で時間指定が出来ないことを意味している。これは、属性叙述において時間の指定が出来ないことと並行的である。また、(7ab) の対立は、数量詞遊離が「すぎだ」では不可能なことを意味している。すでに多くの先行研究で指摘されているように、属性叙述文では数量詞遊離が許されないので（三原 1998；Homma et al. 1992等）、この事実からも、「V すぎだ」が属性叙述であることがわかる。

上記の観察に基づいて、「V すぎる」と「V すぎだ」の項構造を図式化すると(8)のようになり、仮にこの図式が正しければ、(9) のような（表層）構造を持つと予測される。

- (8) a. V すぎる：[ϕ , 命題]
 b. V すぎだ：[属性主, 命題]
 （下線部=外項）

- (9) a. [太郎が [t寿司を食べ] すぎだ]
 b. [太郎が [ϕ 寿司を食べ] すぎだ]

(9) の構造は、すなわち、「V すぎる」がいわゆる繰り上げ構造を、「V すぎだ」がいわゆるコントロール構造を持つことを示している⁴⁾。次節以降では(9)の構造の妥当性を検証していく。

3. 繰り上げ構造とコントロール構造

具体的な議論に入る前に、本稿の議論と密接に関わる繰り上げ構造とコントロール構造について、典型的な統語的複合動詞の例を挙げながら簡潔に述べたい。

生成文法の伝統的な議論では、表面的には似通った形式を持つ以下の(10ab)において、語彙意味的な差異だけでなく構造的差異も存在することが明らかにされている（影山 1993；由本 2005；岸本 2009等）。

- (10) a. 太郎が寿司を食べかけた。

b. 太郎が寿司を食べ忘れた。

具体的には、(10a)の「Vかける」は外項が存在しない繰り上げ構造(非対格型構造= (11a))を、(10b)の「V忘れる」は外項が存在するコントロール構造(他動詞型構造= (11b))を持つとされている。

(11) a. [太郎が [t_i寿司を食べ] かけた]

b. [太郎が [φ_i寿司を食べ] 忘れた]

すなわち、「Vかける」は命題を内項に取る一項動詞であるのに対し、「V忘れる」は「経験者」を外項に、命題を内項に取る二項動詞であるということである。そして、前者では埋め込み節内の主語が格を得るために主節の主語位置に移動するのにに対し、後者では埋め込み節内の主語が埋め込み節の主語位置に留まり、目には見えない空代名詞(φ)となる⁵⁾。

上記の(11ab)の構造を仮定する妥当性は、以下のようなデータで示されてきた。

(12) a. 雨が降りかけた。

b. *雨が降り忘れた。

(13) a. 太郎が花子を殴りかけた=

花子が太郎に殴られかけた

b. 太郎が花子を褒め忘れた≠

花子が太郎に褒められ忘れた

(14) a. 閑古鳥が鳴きかけた。

b. #閑古鳥が鳴き忘れた。

(#はイディオム解釈が得られないことを意味する)

(15) a. 全ての学生が単位を取りかけた。

(全て>かける, 全て<かける)

b. 全ての学生が単位を取り忘れた。

(全て>忘れる, *全て<忘れる)

(12ab)の対立は、主語選択制限の有無を示しており、主語選択制限がある場合(= (12b))には外項が存在するコントロール構造をとるとされている。(13ab)の対立は、埋め込み節述語の受動化による意味の変化の有無を示しており、意味が変化する場合(= (13b))には外項があると仮定され、主語選択制限の事実と同様に、コントロール構造であるとされる。(14ab)では、埋め込み節にイディオム表現が用いられており、イディオム解釈の有無が構造の違いを示すとされている。イディオムは、全ての要素がひとまとまりではじめて特殊な意味((14)の「閑古鳥が鳴く」の場合には「閑散としている」)を生むので、主節主語位置の名詞句

が埋め込み節述語の項でないコントロール構造(= (14b))ではイディオム解釈が得られないことになる。(15ab)の対立は量子子(「全て」)の作用域に関するもので、繰り上げ構造(= (15a))では「全て」が「かける」より広い解釈も狭い解釈も得られるのに対し、コントロール構造(= (15b))では狭い解釈が得られない。この事実は、繰り上げ構造においては埋め込み節内の主語が主節主語位置に移動していることを示している。

以上で見てきたように、生成文法理論では、表面上は似たような形式でも、その背後には異なった構造があることが明らかにされてきた。

4. 「Vすぎる」と「Vすぎだ」の構造

ここで、「Vすぎる」と「Vすぎだ」の議論に戻りたい。まずは、3節で確認したテストを用いてそれぞれの構造を明らかにする。

[主語選択]

(16) a. 雨が降りすぎた。

b. 雨が降りすぎだ⁶⁾。

[埋め込み節内受動化]

(17) a. 太郎が花子を叱りすぎた=

花子が太郎に叱られすぎた

b. 太郎が花子を叱りすぎだ=

花子が太郎に叱られすぎだ

[イディオム解釈]

(18) a. 閑古鳥が泣きすぎた。

b. #閑古鳥が泣きすぎだ。

[数量詞の作用域]

(19) a. 全ての学生が単位を落としすぎた。

(全て>すぎる, 全て<すぎる)

b. 全ての学生が単位を落としすぎだ。

(全て>すぎだ, *全て<すぎだ)

上記の結果を見ると、興味深いことに、「Vすぎる」は全てのテストにおいて繰り上げ構造であることが示唆されるが、「Vすぎだ」においては、繰り上げとコントロールの両方の構造的特徴を持つことが示唆される。具体的に述べると、「Vすぎだ」は、「主語選択」及び「埋め込み節受動化」においては繰り上げ構造の特徴を、「イディオム解釈」及び「数量詞の作用域」においてはコントロール構造の特徴を示すということである。2節では、

その意味的特徴から「V すぎだ」はコントロール構造をとることが予測されると述べたが、それではなぜ、主語選択と埋め込み節の受動化テストでは繰り上げ構造をとると判断されるのであろうか。本稿では、これは繰り上げとコントロールを測るテスト自身の問題であると考ええる。

まず、主語選択テストであるが、これは、ある述語が「動作主」「経験者」などの意味役割を項に付与すること、言い換えるならば、外項を持つことを示すテストであるとされてきた。確かに、例えば(20)のように、外項に経験者という意味役割を付与する「忘れる」では、無情物主語である「雨」は不適格である。

(20) *雨が降り忘れた。(=再掲 (12b))

しかし、今問題となっている「V すぎだ」が外項に付与する意味役割は「属性主」であり、「属性」という意味役割は、無情物の意味役割としても有り得る。したがって、「V すぎだ」はコントロール構造を持っていながらにして、主語に無情物が生起することを許す。これはすなわち、主語選択テストが外項の有無を完全に切り取れないことを意味している⁷⁾。つまり、主語選択制限があることはある述語がコントロール構造であることを示唆するが、主語選択制限がないことはある述語が必ずしも繰り上げ構造であることを意味しない。

次に、埋め込み節受動化テストであるが、本稿では、「V すぎだ」が外項に与えるのが「属性主」という意味であるため、最終的な意味が同義になっているだけであると考ええる。以下の(21)の例を見られたい。

(21) a. 太郎が花子を叱りすぎだ。

b. 花子が太郎に叱られすぎだ。

(21a)では「太郎が「花子を叱りすぎる」を属性として持っている」ことを、(21b)では「花子が「太郎に叱られすぎる」を属性として持っている」ことを述べており、厳密には「太郎」の属性を述べるか「花子」の属性を述べるかで両者は異なっている。しかし、事態としては同じことを描写していると考えて差し支えない。言い換えると、「太郎が花子を叱りすぎだ」は「花子が太郎に叱られすぎだ」を含意しているのである。

上記の事実は、主語選択テスト及び埋め込み節

受動化テストが測っているものが、あくまでも主語の「意図性」であることに起因している。主語に「動作主」という意味役割を与える場合はもちろん、「経験者」でも「意図性」が関与する場合がある。例えば、主語の意味役割が「経験者」である述語「忘れる」であっても、「何かをし忘れること」の背後には埋め込み節事態の成立に向けた経験者の意図が存在する。すなわち、埋め込み節事態を実行しようという行為者の意図が「し忘れる」の背後にはあるのである。

ここで注意されたいのは、イディオム解釈や数量詞の作用域のテストに関しては、「意図性」の有無は関係ないということである。イディオムは、その項がすべてひとまとまりで特殊な解釈を生むので、コントロール構造では、主節の主語は主節述語の項であり埋め込み節述語とは意味関係を結ばないため、特殊な解釈を得られない。したがって、イディオム解釈テストからは、主語の埋め込み節からの繰り上げの可否を判断できる。(18)で見たように、「閑古鳥が鳴きすぎだ」からイディオム解釈が得られないのは、「V すぎだ」がコントロール構造であるためである。すなわち、「閑古鳥」はあくまでも「すぎだ」の選択する項であり、埋め込み節述語「鳴く」の項としては捉えられないのである。また、同様のことが数量詞の作用域についても当てはまる。数量詞の作用域の問題は、その構造的な位置の問題であるので、意味の問題には関与しない。

上記の議論に基づくと、「V すぎる」と「V すぎだ」の構造は、それぞれ繰り上げ構造とコントロール構造ということになり(= (22))、これは、基本的にそれぞれの意味(項構造)と対応しているということになる。

(22) a. [太郎が [t_i 寿司を食べ] すぎた]

b. [太郎が [φ 寿司を食べ] すぎだ]

(=再掲 (9))

以上、本節では、「V すぎる」と「V すぎだ」の統語構造を明らかにした。

5. 「V すぎる」「V すぎだ」と再構造化現象

本節では、生成文法理論で盛んに議論が行われてきた「再構造化 (restructuring)」に焦点を当て、

「V すぎる」と「V すぎだ」が再構造化という観点からも興味深いデータを提供することを示す。

一般的に、再構造化現象とは、表面的には述語が二つ以上存在する複文が統語的には単文として振る舞う場合を指す (Miyagawa 1987)。日本語では、埋め込み節述語が時制形態を伴わない統語的複合動詞も再構造化現象が観察されるとされてきた。こうした時制辞が再構造化の有無に関与することはよく知られており (Wurmbrand 2001)、「V すぎる」と「V すぎだ」は、どちらも埋め込み節述語が時制形態を伴っていないことから考えると、どちらも単文として振る舞うことが予測される。しかし、結論から先に述べると、「V すぎる」は単文、「V すぎだ」は複文であると考えられるデータが存在する。

まず、埋め込み節述語が状態述語の場合、与格主語の可否が「V すぎる」と「V すぎだ」で異なることがわかる (= (23))。よく知られているように、日本語では述語が状態性を持つ場合、与格主語が許される (= (24)) (柴谷 1978等)。

- (23) a. [太郎には [英語が出来な] すぎた]
b. * [太郎には [英語が出来な] すぎだ]
(24) a. *太郎には英語を話す。
b. 太郎には英語が出来る。

(23) では埋め込み節述語が「出来ない」という状態述語であり、この場合主語を与格でマークすることが可能であるが、与格主語が許されるのは、(23a) のみである。こうした格付与は、基本的には節を越えるとは考えにくい (= (25))。

- (25) a. * [太郎には [花子が英語が出来ること] を知った]
b. [太郎は [花子には英語が出来ること] を知った]

したがって、(23) の事実、(23a) では節境界を超えた格付与が行われている一方、(23b) ではそれが不可能であることを示唆している。すなわち、「V すぎる」は単文として振る舞うが、「V すぎだ」は複文として振る舞うということである。

次に、否定極性表現「しか」を用いた例を見られたい。(26) の例からわかるように、「しか」は否定辞と同一節内で呼応しなければならないことがよく知られている (Muraki 1978等)。

- (26) a. *太郎しか [花子が秘密を知らないこと] を聞いた。
b. 太郎は [花子しか秘密を知らないこと] を聞いた。

ここで、「V すぎる」と「V すぎだ」と「しか」の振る舞いを見ると、対照的な結果が得られる。

- (27) a. [太郎しか [意見をいわな] すぎた]
b. * [太郎しか [意見をいわな] すぎだ]
したがって、状態述語における与格主語の場合と同様に、「しか」のテストからは、「V すぎる」は単文構造、「V すぎだ」は複文構造であると判断することができる⁸⁾。

上記の事実からは、「V すぎる」及び「V すぎだ」が形式上は似通っていても、構造的には異なった振る舞いを見せることがわかる。再構造化現象という観点から考えても、両者は興味深い構造的対立を示すのである。

6. おわりに

本稿では、「V すぎる」と「V すぎだ」を取り上げ、それぞれの意味的特徴 (= (28)) と統語構造 (= (29)) を明らかにしてきた。

- (28) a. V すぎる: [ϕ , 命題]
b. V すぎだ: [属性主, 命題]
(29) a. [太郎が [t寿司を食べ] すぎた]
b. [太郎が [ϕ 寿司を食べ] すぎだ]

(=再掲 (8)、(9))

本稿では、「V すぎる」と「V すぎだ」のみを取り上げてきたが、「複合動詞か、派生名詞による複雑述語か」といった述語形式の違いが、意味と構造の違いに関与していることを明らかにすることができたと思う。こうした述語形式の差異が、単なる表面上の違いではなく、構造的な差異も生んでいることは注目に値することであり、今後より厳密に意味的・構造的な観点から検証を進めていく必要がある。

注

- 1) 複合動詞に関する研究は、その構造・意味・用法を含め数多くの研究がある。特に影山 (1993) は、形態論の観点から、複合動詞がその形成部門によって語彙的なものと統語的なもの分けられることを明らかにしている。

- 「V すぎる」は統語的複合動詞の一つであるとされており、「V すぎだ」も統語的派生名詞であると考えられる。
- 2) 「すぎる」は、正確には、形容詞や形容動詞にも接続し（「赤すぎる」「静かすぎる」）、動詞のみに接続するわけではないが、本稿での対象は、埋め込み節述語の統語範疇が動詞のものに限るので、便宜上、「V すぎる」「V すぎだ」という表記を用いる。
- 3) 内項を「V すぎ」が修飾する場合の構造は、「履歴属性」の構造とはかなり異なる可能性もある。例えば、すでに(3a)でも示されているように、「V すぎだ」は埋め込み節述語の項構造を変える「自動詞構造」になっている（新山 2018）。このような理由も踏まえ、本稿では「履歴属性」を表す「V すぎだ」に議論を限定する。
- 4) (9a)の埋め込み節内のtは、主節位置に移動した「太郎」の痕跡（trace）を、(9b)のφは目に見えない代名詞を示しており、下付き文字のiは、それぞれの要素の解釈が同一であることを示している。
- 5) 生成文法の束縛・統率（Government and Binding）理論では、φの位置にはPROと呼ばれる空要素が仮定されることが多いが、本稿での議論は記述的観察に焦点を当てるため、こうした空要素の統語的特性には言及しない。
- 6) 由本（2012）にしたがうと、外項を「すぎ」が修飾するときに「履歴属性」を意味することになる。ここでの「（雨が）降る」は、非能格の特性も非対格の特性も持つことがよく知られている（松本 1998）。仮に、「（雨が）降る」が非対格であるということであれば、本稿での対象からは外れることになるが、ここでは「（雨が）降る」を非能格動詞と考え、「雨」を外項であると仮定して議論を進める。
- 7) Zushi（2008）も、主語選択テストはあくまでも意味的なテストであり、コントロール構造を測るテストとは区別される必要性に言及している。
- 8) 「V すぎる」のような統語的複合動詞が単文の振る舞いをする点に関してはOprina（2014）等にも言及がある。一方で、「V すぎだ」が複文として振る舞うという言及は管見の限りないが、「V すぎる」と「V すぎだ」の対立にはどのような説明が与えられるだろうか。一つの可能性として、「V すぎだ」の「すぎ」の統語範疇が名詞であり、それが再構造化を妨げているとすることもできるが、この点に関しては稿を改めて論じたい。

参考文献

井本亮（2008）「第5章 限界点を越える——「V-すぎる」の意味計算と解釈コスト——」岩本遠億（編）『事象アスペクト論』pp. 323-368, 開拓社。

- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房。
- 岸本秀樹（2009）「補文をとる動詞と形容詞：上昇とコントロール」影山太郎（編）『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』pp. 152-190, 大修館書店。
- 柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店。
- 東寺祐亮（2018）「Vスギル構文の統語的条件と解釈」『日本語文法』18-1, pp. 3-19。
- 新山聖也（2018）「名詞性を持つ複雑述語・文末形式における自動詞構造の分析」『日本語学会第156回大会予稿集』pp.51-56。
- 益岡隆（2008）「叙述類型論に向けて」益岡隆（編）『叙述類型論』pp. 3-18, くろしお出版。
- 松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, pp. 37-83。
- 三原健一（1998）「数量詞連結構文と「結果」の含意〈上〉〈中〉〈下〉」『月刊言語』27-6, 7, 8, pp. 86-94, 94-102, 104-113, 大修館書店。
- 由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房。
- 由本陽子（2012）「動詞+過ぎる」と述語名詞としての「動詞+すぎ」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の進展3 語彙と品詞』pp. 123-143, くろしお出版。
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda, and Koichi Takezawa (1992) Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese, In *Proceedings of the 5th Summer Conference of Tokyo Linguistic Forum*. pp. 15-28, Tokyo : Tokyo Linguistic Forum.
- Miyagawa, Shigeru (1987) Restructuring in Japanese. In Takashi Imai and Mamoru Saito (eds.) *Issues in Japanese Linguistics*. pp. 273-300. Dordrecht : Foris.
- Muraki, Masatake (1978) The shika nai construction and predicate restructuring. In John Hinds and Irene Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. pp. 155-177. Tokyo : Kaitakusha.
- Oprina, Florin D. (2014) V-V predicates and restructuring. In 岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』pp. 149-175, ひつじ書房。
- Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives : Restructuring and Clause Structure*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Zushi, Mihoko (2008) Some remarks on the lexical nature of restructuring predicates. *English Linguistics* 25. pp. 340-363.
- （あくざわ・こうよう 聖学院大学 特任講師）